

鶴見線海芝浦駅縁起

——笙野頼子「タイムスリップ・コンビナート」と「五五年体制」

島村 輝

目次

はじめに——「歴史」と「文学」を結ぶ方法としての「縁起」

I. マグロともスーパージェッターとも判らんやつ

II. 沖縄会館と鶴見埋立

III. 田町と浮島と海芝浦——三つの「東芝」

おわりに——「五五年体制」の始まりと終わり

はじめに——「歴史」と「文学」を結ぶ方法としての「縁起」

井上光晴の『西海原子力発電所』（文芸春秋社、1986年）を見ていくと、放射線被曝もしくは放射能の被害というものは、何十キロという線を引き、特定して避難を勧告するという行政的な対処を行うことがまことに理不尽なものであり、全体として包括的に人間を害していくものであると考えざるをえない。

自分は30年ほど前から、当時とはとりくむ人の少なかった小林多喜二を研究テーマとし、長いこと彼の仕事を追いかけて、前後に、また左右に幅を広げながら、文学と歴史、社会の関連を考えてきた。そうした研究を通じて、日本の近代、すなわち開国以来約150年の間のさまざまな出来事が、実はひとつの物語としてつながっていて、ある時代を区切りある特定な時代を取り出して、そこだけを論じていくわけにはいかないと考えるにいった。またここ数年、「九条の会」などの活動に携わる中で、以前は文学とは違う地平で捉えられることが多かった平和や環境の問題についても、文学を研究することと、そうした問題にとりくむことは実は切り離されてはいないとも、考えるようになった。たまたま作家の林京子さんがご近所に住んでいて「九条の会」の中でお話を伺ったり、そういう意味で身近にいらっしゃる方の作品として林さんの作品を読んでいったりする機会にも恵まれた。

3.11の日、自分は教授会のあと研究室にいたが、今までに経験したことのないような、船に乗っているような揺れを経験した。最初は大きな地震かと思ったが、今まで自分が経験した地震とは揺れ方が違ったので、ひょっとしたらただの地震ではないかもしれない、もっと巨大な災害かもしれないと思い、研究室のブラインドを上げて、目の前に見える富士山を見た。その時、私の頭の中に黒澤明の『夢』（1990年）という映画の中の「赤富士」というエピソードの一場面があった。これは富士山の裏側で原子力発電所が次から次に大爆発を起こしているというところから始まり、そこから放射能が広がって、一人残らず死んでいってしまうというストーリーである。もちろんブラインドを開けて目にした富士山は爆発してはいなかったが、その映画の記憶が鮮明で、もし富士山が爆発したらどうなるのかが気にかかっていたので、自然に見たのだろう。

その後、信号が止まった道路を車で長時間をかけて帰ったが、夕暮れの太陽の色がまことに不気味だった。井上光晴が、原爆が落ちたとき、赤い月が出てきたと書いているが、非常に悪い兆しのように見え、「なんだか縁起の悪い空だな」と感じた。「まだまだ悪いことが起こるのではないか」と思わせるような空の色だったと覚えている。空の色は偶然と言えば偶然かもしれないが、そのあと車の中で福島第一原子力発電所の電源が切れていると、そして原子力災害緊急事態法を受けて緊急事態が宣言されたということを聞いたとき、これから長く、厳しい状況が続くだろうと直感した。そして、ご存知のように、3月12日に第1号機が水素爆発し、14日に第3号機が爆発して建屋ごと吹っ飛んでしまった。

この状況の中で、自分は家族と一緒にしばらく九州の方に疎開した。あの場合、どこまで事態が悪くなるのかということに対して誰ひとり確約できる人

はいなかっただろう。「原子力災害対策本部」では炉心溶融や爆発、放射能漏出の危険について議論になっていたというが、ニュースなどでは部分的にしか報道されない。記者会見など表に出てくる話を聞くと、とてもそんなものではないはずだということはわかるが、しかし、信頼できると思われる情報は極めて断片的な形でしか入ってこない。たぶん最初に入ってきたのはドイツの、気象情報のための風向予想システムが、原子力の拡散がどこまで行くかと知らせていることだったと思う。その中で東京を離れなければならないと考えたのだ。

しばらくしてから東京へ戻ってきたが、決して現在も安全が確保されて終息したとも、安心な状況に立ち戻ったとも言えないということを、日々の生活の中で感じている。

その中で林京子さんとのインタビューも実現した。3.11 以前から企画されていた仕事だったが、林さんにしてみれば、まさに長崎で被爆をされ、それから長い時間をかけて様々な事態を目にし、耳にし、JCO の臨界も取材をしに行かれて、そして今日また福島原発事故を目の当たりにする、その後のインタビューとなった（林京子『被爆を生きて』岩波ブックレット、2011 年）。

事件や事故というものは、他の出来事と切り離されてひとつだけ、単独におこるわけではないとみんなが分かっているはずだが、とにかく私たちは目の前に目にいき、判断を誤る。恐らくは今原子力発電所を停める、停めないという議論をしている中でも、多くの政治家たち、財界人たちの頭の中には、自分の目に入る範囲の中での利害関係しかないのではないだろうか。そこで笙野頼子の 1994 年の作品「タイムスリップ・コンビナート」と「五五年体制」を考えることで、3.11 後の福島第一原発事故と戦後日本社会とのつながりを明らかにしようという意味で、「鶴見線海芝浦駅縁起」というタイトルを掲げてみた。

私は 2009 年 6 月から 2011 年 6 月まで 2 年間、日本社会文学会の代表理事をやっていたが、11 年春、機関誌『社会文学』で、成田龍一さんを編集長に 1950 年代の文学と文化を中心に据えた特集を作った。その中で成田さんと内海愛子さん、自分と総勢 3 人で

座談をさせていただいた。そういうことをやっていたこと、また「戦後」の問題についても論文などで考えたこともあって「1945 年にアジア・太平洋戦争敗戦という形で、一応戦争は終わったはずだが、いつの間にかまた新しいパワーポリティックスの中に組み込まれていく。そういう中で世界の様々なところで起きている戦争に実は日本も組み込まれていくという、それがいったいつからどのような仕組みで起こってしまったのだろうか、それを考えなければならぬ」ということが、問題意識に上ってきた。

一方では筆者が専門とする「文学研究」という分野を考えると、「日本近代文学」として囲われているその対象を、「文学」として認められた研究制度の中で「研究」していくというような、アカデミズムの大枠が決められている中で言説を繰り広げていく方法についてもやや疑問を抱くようになった。以前から方法的なことを考え、少しずつは手をつけてきたが、やはりもう少し歴史や社会と絡めて文学を研究する方法について深めて考え直していかなければならない。

笙野頼子の「タイムスリップ・コンビナート」という作品は、それだけを見るかぎりでは原爆も原発も出てこない。一方、その風景を特徴づける印象的なフレーズとして「高度成長の遺跡のような場所」だということばが何回か出てくる。「高度成長」というのは「五五年体制」が作り出した日本が、20 世紀後半に経験していた一連の出来事の一つとってよかろう。恐らくは 1980 年代くらいまで、その動きが続いていたと思うが、そういうものが崩れていった。京浜コンビナートの荒涼たる風景はその名残だ、という主旨が、この「タイムスリップ・コンビナート」の中で、さまざまな角度から物語られている。私は、実はこの風景はただ単に「高度成長」の時代だけではなくそれ以前、またそれ以後をその中に含みこんでいる、そういう「風景」なのだろうと考えている。

タイトルでは「縁起」ということばを用いているが、「縁起」とは、もともとは仏教用語で「因縁によってあらゆるものが生ずる」という意味である。

縁起とは

①物事の吉凶の前兆。きざし。前ぶれ。

- ②社寺の起源・由来や靈驗などの言い伝え。また、それを記した文献。
- ③事物の起源や由来。
- ④〔専門〕仏 因縁によってあらゆるものが生ずること（『大辞林』）

「因縁起生」、つまり因縁によって起きる、生まれるという「因縁起生」の省略が「縁起」である。仏教において、すべてのものごとは関係性の連関の中でしか形が現れないことを、哲学的に解き明かすようなことばなのだ。20世紀の現代思想といわれるものにおいてもこの「縁起」というものに言及するということがあるのだが、一般に「縁起」ということばが現在はどうに使われているかという、アクセントも変わって主に①の意味で使われている。物事の前兆、兆し、前触れとして、「縁起がいい」、「縁起が悪い」、「縁起でもない」という調子である。しかし、もともとは前触れとか兆しということに関連して、事物の由来、発生することがらの起源を説明するものとして、すなわち③の意味で使われた。これが、文学の中で使われてくる場合には社寺の起源や由来、靈驗などの言い伝えを記した文章、文献のこととなる。

様々な寺や神社に、過去にはどういう建物があり、そこに仏や神が現れたということでこの建物が出来たと言いつた場合がある。その神や仏が現実にはそこに現れたかどうか、今日に見ることはできないが、それが語り継がれて、今ある建物やお寺、神社の由来を説明するのが社寺の「縁起」なのである。つまり社寺の「縁起」は、過去の出来事を語ることばなのだ。一方「縁起がいい」「縁起が悪い」などという用法では、将来どうなるかという予兆、予言、兆しを言う。すなわち「縁起」とは、過去および未来をつなぎ、しかも現在のすべてのものの関係性が含まれているという、哲学的に非常に奥深く、面白いことばなのである。

「文学」もまた、現代の言語理論からいえば「関係性」によって発生する（いわば「縁起」そのものである）「ことば」で作られている以上は、その「関係性」という点において「歴史」や「社会」を内包しているのではないかと考えられる。ひとつの小説

のなかの一つの物事、ひとつの出来事そのものを記述するひとつのことばも、他の膨大なことばの網の目のなかで意味づけられるのであって、決してそのことばそのものが他と切り離されて存在するのではない。そのため文学作品を構成する一つ一つのことばをさかのぼっていけば、その背景に無数のことばによる出来事の記述が連鎖的に潜在していると言えるだろう。そうすると、ことばによる作品を読んでいくということ、読書という行為は、一つ一つが関係性を内在させていることばというものを次々と採り入れていくということであり、いわば関係性の集まりとして時間性と空間性を含んだ世界そのものの存在の仕方、すなわち「縁起」を認識するということになるかと思うのだ。ならば「文学」はその中に「歴史」性を含むという意味で文学作品そのものを、歴史を内包するものとして読めないだろうかとも思うのである。

I. マグロともスーパージェッターとも判らんやつ

「タイムスリップ・コンビナート」という作品の、いわゆる「あらすじ」を説明すると、それは極めて単純であり、ナンセンスなものになってしまう。しかし問題は「あらすじ」ではなく、そこで連ねられていることばの中に、どのような重層的で歴史的な文脈あるいはその風景を構成している現実の社会というものが潜在させられているのかである。ここではそれを掘り起こしていつてみたい。

【梗概】 マグロと恋愛する夢を見ていた去年の夏頃、私のもとに一本の電話がやかってくる。電話の主は「マグロともスーパージェッターとも判らんやつ」で、私は電話の主を訳のわからない会話をし、なんとなく、しかし半ば強引に「海芝浦」という駅に行くことになる。「海芝浦」は JR 鶴見線の終着駅で、ホームの一方が海に面し、一般人は出構することができない、東芝社員のための駅である。そこは「高度経済成長の遺跡」のような場所であった。私は行きたくないと言いながら、「恋愛用のマグロ」の「...イラッシャイヨ...」という声や、ブレードラン

ナーの幻想、「沖縄海岸（会館）」などに心惹かれて目的地を目指していく。その旅路で私は何度も思い出の中へとタイムスリップしていく。思い出の中には、私が育った四日市のコンビナートの風景、父が持ち帰ったアメリカ製チョコレートなどが浮かんでくる。行路の果て、荒涼たる海芝浦駅で見えたものは、そのまま日本近代化の過去と、その崩壊後の近未来の重なる風景だった。

去年の夏ごろの話である。「マグロと恋愛する夢を見て」悩んでいたある日、「マグロともスーパージェッターとも判らんやつ」からいきなり電話がかかってきたと書かれている。この話の最後にまたマグロの話が登場しているが、中野ブロードウェイの地下でマグロの目玉を600円で売っているという非常に不思議な結末部分になる。マグロというのは何であるだろうか。笹野頼子は1954年生まれで、「マグロといえばピキニだ」というようにストレートに結び付く世代ではないが、記憶として子供の時に見た過去の週刊誌、様々な本などに出てくるものであったはずだ。思い当たるであろうが、マグロというのはまさに水爆の実験と深くかかわりを持っているものであった。

1954年3月1日、遠洋マグロ漁船・第五福竜丸が米国の水爆実験によって発生した多量の放射性降下物、いわゆる死の灰を浴び、無線長・久保山愛吉が半年後の9月23日に肝炎で亡くなる。この被爆の事実、そもそもアメリカのピキニでの水爆実験そのものが隠されていたものであったためにしばらく報道されず、第五福竜丸が戻ってきたことによって一般報道が起り、そのあと被爆の問題、「放射能マグロ」の大量廃棄の問題、また残留放射能に対する危惧から魚肉の消費が落ちるなど社会的問題が起きたのである。ちなみにこれらのマグロは築地市場内に埋められ「原爆マグロ塚」が建てられた。今、石原東京都知事が主導する市場移転の計画があるが、その移転先というのが大変汚染された土地の土地ではないかと問題になっているのが皮肉である。このいわゆる「原爆マグロ」問題、第五福竜丸が被爆をしたピキニの水爆事件の前後にどのような核開発、そして

「原子力の平和利用」という名の下に行われたイベントがあったのかということを読み、その系列をたどってみたい。

1952年11月1日、アメリカは太平洋のエルゲブラ環礁で水素爆弾の実験を行っている。エルゲブラ環礁は、現在は存在していない。この水爆実験で吹き飛んでしまって、跡形も残っていない。ところが1953年8月12日、ソ連がRDS-6という爆弾の実験を行った。当時はソ連が「水爆実験をした」と考えられたが、のちに水爆ではなく原爆の強力なものであったと言われるようになる。しかし当時はソ連が水爆を開発するようになったと思われた。その中で、1953年12月8日、アメリカのアイゼンハワー大統領が国連で「原子力平和利用」の計画を発表し、「原子力平和利用」という名目の国際機関の設立の提案をする。これは国際社会で歓迎を受けるということになったが、そう言いながら一方では1954年3月1日にピキニで水爆実験を行った。その翌日3月2日、中曽根康弘国会議員によって日本国に、初の原子力予算が上程された。両院議員総会でこの原子力の平和的利用研究費補助金として提案され、2億3500万円というのが当初の予算となる。

なぜ、この金額になったのだろうか。中曽根自身が回想録で語っているが、これはウランウムの235、つまり原子力の開発に必要なウランウムの同位体の原子量をあらわしたものである。これがあつという間に自由党・改進黨・日本自由党、三党の共同修正案として提出され、2日間の間に趣旨説明、そして修正案を含めて一括採択とされる。

第五福竜丸事件が明るみにされる中、1954年4月、アメリカの国家安全保障会議作戦調整委員会で「水爆や関連する開発への日本人の好ましくない態度を相殺するための米政府の行動リスト」が起草され、「日本人患者の発病の原因は、放射能よりもむしろサンゴの塵の科学的影響とする」、「放射線の影響を受けた日本の漁師が死んだ場合、日米合同の病理解剖や死因についての共同声明の発表の準備も含め、非常事態対策案を練る」と決定されている。そして1954年9月23日、久保山無線長がなくなる。そのとき「原水爆による犠牲者は、私で最後にしてほしい」という遺言を残していく。これが日本国内に強

烈な反核運動を起こすきっかけになった。アメリカは日本政府との間に被爆者の補償の交渉を急ぎ、「米国の責任を追及しないこと」の確約を日本政府から受けて、翌年 1955 年 200 万ドルの「見舞金」を支払うことによって政治決着をつける。林京子さんへのインタビューを企画した岩波書店の吉田さんが、次の「岩波ブックレット」の企画として作られたのが、そのとき病院から強制的に退院させられた第五福竜丸の乗組員の中のもっとも若いひとりである大石又七さんの歩みをまとめた、小沢節子さんの『第五福竜丸から「3.11」後へ 被爆者大石又七との旅路』(岩波ブックレット、2011 年)であった。これがつまり、マグロということばが持っている原子力、水爆の記憶の原点である。

そして、この水爆の記憶は直ちに原水爆の禁止運動の始まりと結びついていくことになる。昨年、広島で行った「社会文学会」の大会で、原爆、水爆のイメージについて広島大学の川西英通さんが発表したもの(発表時タイトル「肯定形としての〈原爆〉——占領期のいくつかの言説」)のダイジェストが、『社会文学』34 号(2011.6)に掲載されている。そこで明らかにされているのは、1954 年までは、一般の日本人にとって、原子爆弾のイメージというのは実はそれほど悲惨で、ひどい被害をもたらすものだとは認識されていなかったということである。そう考えざるを得ないような様々な言説が流布していたことが、川西さんの研究では明らかにされている。ここが一つの大きなきっかけとなる。

「マグロともスーパージェッターとも判らんやつ」となっているが、スーパージェッターとは何であるだろうか。スーパージェッターは 1965 年から 1966 年に、久松文雄の原画によってアニメ化されたテレビアニメーションである。

このアニメ番組は「僕はジェッター。1000 年の未来から、時を超えてやってきた」と言うセリフから始まる。この「スーパージェッター」というのはテレビのためのオリジナルキャラクターである。『スーパージェッター』の前の番組は『エイトマン』だったが、これは桑田次郎という漫画家に著作権があって、その著作権のあるものをアニメーションにした。そして非常にヒットして、著作権があるのにもかか

わらずアメリカでもアニメーションシリーズとして独自に展開されてしまった。そこで放送元の TBS が、著作権を自分で持って、プロジェクトとして作れるということでオリジナルキャラクターを久松文雄に考案させ、そしてそこで作り出されたのが「スーパージェッター」である。久松文雄は漫画を書き、シナリオには豊田有恒、半村良、眉村卓、筒井康隆らが参加、毎回交代でシナリオを描いていた。これはタイムスリップの話である。30 世紀を生きるタイムパトロールの少年が、タイムマシンの事故によって 20 世紀の今日にやってきた。タイムスリップした別の悪漢も 20 世紀にあらわれて、それを彼が追跡していく、という筋立てになっている。ところで、「スーパージェッター」ということばが出て、彼は未来からやってきたという話になるが、このタイムスリップに関連して、近未来小説、近未来映画として大変名高いものに「ブレードランナー」という作品がある。映画は 1982 年、監督はリドリー・スコットである。これが、笙野のこの作品の中にも時々出てくる。「私はブレードランナーのレプリカントかもしれない。」など。「ブレードランナー」について簡単に説明をすると、2019 年、地球環境の悪化により人類の大半が宇宙に移住し、宇宙開拓の前線では遺伝子工学により開発された「レプリカント」と呼ばれる人造人間が、奴隷として過酷な作業に従事していた。レプリカントは、外見上では本物の人間とまったく見分けがつかないが、過去の人生経験がないために「感情移入」する能力が欠如しているとされていた。ところが、製造から数年後、次第に彼らにも感情が芽生えてきて人間に叛旗を翻すようになり、それを鎮圧するためにブレードランナーと呼ばれる専門の捜査官が結成されるという話である。田端展の「被曝舞踊曲」の中に出てくる亡霊人形の行動のあり方などは、このレプリカントが次第に感情を持っていくというようなところに触発されたのではないかと考えられる。原作はフィリップ・K・ディックの SF 小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』という非常に高名な作品であるが、この映画では環境汚染にまみれた退廃的な近未来の都市像がリアルに映像化されている。そして、オーウェルの『1984 年』が、書かれた時点ではかなりの未来のこととされていてい

たのに、すでに現実が追い越してしまったように、この「ブレードランナー」の2019年という時間も私たちの非常に近いところに迫ってきているということある。ではこの「スーパージェッター」と「海芝浦」、「ブレードランナー」がどう結びつくだろうか。

II. 沖縄会館と鶴見埋立

晴れた午後、暑さも音もスイッチを入れたように戻って来ている。新芝浦からもう東芝の壁が見える。外はブレードランナー、内はスターウォーズ、私はレプリカント、どっかにマッドマックスだってあるかもしれない。一旦滅びた後の近未来や、地球からうんと遠い星の光景というのは、どこか不況っぽいものなのかもしれないという気がしてくる。

「海芝浦」の風景を見るときに鶴見に行ったその日に、

四十年も前、東芝の技師だった母は半年間だけこの海芝浦の工場に出向いていた。鶴見から帰った日、電話でそれを知った。母は東京近くの東芝の重役の家に泊めてもらい、焼け跡を歩いて、この電車に乗って通勤した。あのホームを見るとね、海に落ちそうな気がして、と母も言った。東芝時代の話は母は私にもしなかったのだ。

現在、東芝の工場にしか出入りできない、この「海芝浦」という駅は終戦直後にも存在していた。一体いつからそんなところに東芝は工場を建てていたのか。非常に不思議な話であり、その駅の出入口やプラットフォームのあり方も大変奇妙なものである。この点を突き詰めて考えていくと、実は京浜工業地帯というのが、いつどこでどうしてできただろうという話になる。というのも、「海芝浦」という駅は「京浜運河」の南のはずれにあるからだ。

京浜工業地帯というのはご存じのように、そのほとんどが埋立地になっている。大田区から川崎、そして鶴見、横浜の北に至るまで、この一帯はほとんど埋立地によって作られている。この埋立地をつく

る会社を興したのが、富山から出てきて、一代に起こしたセメント王と呼ばれる浅野総一郎である。

1914年に鶴見埋築株式会社、現在は東和建築工業となっているが、これを創業して、鶴見で東京湾の埋め立てを始める。京浜工業地帯の形成に寄与、「日本の臨海工業地帯開発の父」、「明治のセメント王」と呼ばれた。この京浜工業地帯の埋立地に鶴見線の前身である鶴見臨港鉄道をも設立した。現在のJR鶴見線に「浅野」という駅がある。まさにこの浅野の名前をとったのである。また、「扇町」駅という名前もその浅野家の家紋の扇に起因している。「浅野」から「扇町」というこの一帯が浅野家の力によって作り上げられた埋立地である。そしてそこに隣接する京浜運河の南の果てに東芝の工場があり、「海芝浦」がある。

この京浜工業地帯の形成は1930年頃まで続くが、その最中に関東大震災が起こる。当時この一帯は埋め立てを行っている最中、すなわち工場が次々に移転してくる最中だったので、工場の労働力が必要となったため、日露戦争後の状況の中で朝鮮半島から出てきた者、韓国併合の後の移住者、あるいは沖縄などから出稼ぎに来た人々が安い労働力として集まり始めていた。その時、関東大震災が起きた。その時に多くの植民地出身者は虐殺されたり、あるいはひどい迫害を被ったりしたわけだが、当時の鶴見警察署の大川常吉署長は、この朝鮮人労働者を警察で保護したことで著名である。在日朝鮮統一民主戦線鶴見委員会という名前で、1953年に大川常吉の業績を記念する碑がここに建てられ、現在も残っている。

このことによってこの街は安全な町であると評判が立ち、外地から多く移民者がさらに集まるようになって、ここにコリアン・タウン、沖縄タウンが形成される。2003年現在、鶴見に住んでいる沖縄出身者3万人と言われている。この沖縄出身者の町は「浅野」の駅からしばらく歩いていったあたりに多くあって、現在はただ単に沖縄だけではなく、沖縄から中南米に移民していた人たちが、日本に帰ってきたときに定住した街としても発達している。コリアン・タウン、沖縄タウンとともにラテンアメリカ・タウンにもなっている。

さて、この沖縄というのは実は主人公の父の仕事

と関係している。

昭和三十年代、という事は私は子どもだ、父はまだ会社を始めていなくて身内のところで雇われ社長をしていた。あのころはもう毎日東京から日帰りしたりしていた。何日か留守にして、アメリカの土産をどっさり持って帰って来た事があった。……

随分長いこと父がアメリカに行って帰ってきたのだと私は思い込んでいた。が、父は沖縄に行ってきたのだ。身内の会社がPXに店を出していたのだ。

沖縄に1960年代に行っていたということが分かる。しかし、1960年代の沖縄は「日本」であったかどうか大変微妙なところである。まだ復帰していない状態であったためだ。1952年のサンフランシスコ講和条約が発効により、沖縄はアメリカ共和国の施政下におかれるものとされる。1960年沖縄県祖国復帰協議会が結成された。1972年5月15日、アメリカ軍基地を県内に維持したままいわゆる「核抜き・本土並み」という条件で返還される。しかし、「核抜き・本土並み」という約束は表向きだけ。密約に基づく公開用だけの条件であって、沖縄には核兵器が存在したまま使用が可能のまま、日本に「返還」された。

オキナワヘンカンという単語や教科書の写真が、頭の中で否応なく点滅して、蕎麦どんぶりの中にどんどん顔をめり込ませるしかなかった。

沖縄タウンで、沖縄そばを食べるシーンである。「沖縄返還」という出来事が「オキナワヘンカン」とカタカナで表記されていることにも注目したい。漢字の持つ「沖縄」「返還」という表意文字の深層にある潜在的な歴史上の含意に適うような意味性を、私たちが経験した「オキナワヘンカン」は担い得ているのだろうか。そのような問いを突き付けられる表記であろう。この主人公は実は三重県の日四市で育っていて、コンビナートの風景というのが、頭の中に焼き付いている。その鶴見のコンビナートを見

たとき日四市を思い出し、そして風が通っていく煙突の音を頭の中に響かせる。

Ⅲ. 田町と浮島と海芝浦——三つの「東芝」

京浜運河の話に戻ろう。

実は「海芝浦」はもちろん「芝浦」との関連でつけられた名前である。電球も原発も作る大企業・東京芝浦電気の「芝浦」だが、本来の芝浦という名前は東京の田町のところ。そこが芝である。田町の芝のところに、埋め立て前にあった浜辺が芝の浜、芝の浦である。落語で「芝浜」というのがある。芝の浜で財布を拾ったという話である。つまり芝というところにはすでに浜があって海がそこにまであったということだ。そこが埋立地にされる。そこが現在の「芝浦」のもとになっている。江戸時代から埋め立てが始まり、明治になってからも埋め立ては受け継がれていく。

京浜運河はそこから始まる。芝浦、浜松町の駅のすぐ前あたりが京浜運河の北限である。そこから品川区、大田区を経て羽田空港にぶつかる。羽田空港で京浜運河は一端途切れるが、それから多摩川を超えて川崎港から大師運河、塩浜運河、池上運河、田辺運河との合流地点を通り、鶴見川河口の京浜港付近まで、「海芝浦」のところまでつながっている。つまり田町から「海芝浦」までつながっているのが京浜運河、その真ん中に羽田空港があるという図が描ける。

この芝浦にできたのが芝浦電気であるが、芝浦電気というのは東京芝浦電気（東芝）の前身会社の一つである。そしてもう一つ東京電気株式会社というのがある。東京電気株式会社と芝浦製作所が合体したのが現在の東芝である。その東芝、実は「からくり儀右衛門」として有名な発明家・田中久重がその創設者であるとされている。

芝浦には1882年、田中製造所が建設される。1883年藤岡市助が東京電力の前身である東京電燈会社を設立した。電力会社から電気株式会社、電燈株式会社が独立して、白熱舎という家庭の電灯をつくる会社ができる。一方、1893年田中製作所は芝浦製作所に名称を変更する。合資会社であった白熱舎が改組改称して、東京白熱電燈球製造株式会社となり、1899

年には東京電気株式会社と名称を変更し、1905年にGEと提携した。1907年、東京電気株式会社が工場を次々と建設していく。このあたり京浜工業地帯の埋め立てが行われる最中である。そしてその京浜工業地帯の埋め立てが、南の端に及んだ1922年に芝浦製作所が京浜運河の南端の鶴見に土地を取得する。その工場の建設の最中に関東大震災が発生した。しかし、芝浦製作所は関東大震災にもめげず、そこに鶴見工場の第一期工事を竣工して1925年に操業を開始する。1932年6月10日、鶴見臨港鉄道線が「浅野」駅から開通し、その終着駅として「新芝浦」駅が開業した。1939年7月、芝浦製作所と東京電気株式会社が合併し、東京芝浦電気株式会社が設立され、翌年、1940年11月1日に、鶴見臨港鉄道線が延伸されて「海芝浦」駅が開通し、鉄道と運河で港区の芝浦と川崎の幸区小向東芝町、そして鶴見の海芝浦が結ばれていく。電車および運河によってこの三つの芝浦なるものが結びつくのである。

さて、東芝は電気の開発、とくに東芝松田ランプが大変有名だが、その東芝が原子力開発に乗り出すのが1956年である。1953年に原子力安全平和利用宣言が出て、1954年にビキニの水爆事件、原子力予算の上程、そしてその通過があった。そして1955年に日米原子力協定が結ばれ、日本原子力研究所が設立され、1956年原子力委員会が発足する。この時に東芝は原子力事業開発部を組織し、1958年に日本原子力事業株式会社（NAIG）が発足するとその中心となった。そして1962年3月、NAIGは原子炉を稼働する。

この時に1機を稼働しはじめ、そのあと2機が作られているが、現在もこの原子炉は存在している。それはどこにあるだろうか。それは京浜運河の真ん中あたり、すなわち羽田空港の多摩川をはさんだ真向かいの東芝の川崎工場の小向地区である。そこに原子炉が現在も存在している。そして2004年には小規模であるが事故を起こしている。川崎にはその原子炉のためヨウ素剤を数千人分用意しているというのが現在の状況である。

この東芝原子力技術研究所は神奈川県川崎市川崎区浮島町4-1にあって、NAIGが所在する場所と同じである。一方、東芝の原子力事業部原子炉機器

部は「海芝浦」駅に隣接する京浜事業所にある。ここで何を造っているかという、炉内構造物、制御棒および駆動装置、燃料取扱機、ポンプなど、おなじく機器装置部では電力貯蔵用超電導マグネット、核融合用コイル、中性粒子入射装置などである。京浜事業所で作っているものがこういうものであって、それが「海芝浦」駅が存在している理由だ。そのため「海芝浦」駅は東芝の職員証を持っていなければ降りることが出来ない。原子力開発の機密部署であるために、部外者はここには入れないのだ。そして先述したように、川崎の小向東芝町の近く、浮島町には原子力の臨界実験用の原子炉がある。そのようなものが羽田空港のすぐ向いの京浜運河上にある。

ちなみに原発人災の混乱の中で斑目春樹氏が有名になった。彼は原子力安全委員会委員長であり、東京大学大学院工学系研究科原子力専攻専門職大学院の教授だが、1972年に東大修士課程を修了し、東芝に入社し、三年間の勤務のあと、東大に戻って順調に講師、助教授、教授という道を歩いている。これでは「原子力発電は危ない」と言えるわけがない。

これまで原発関連で、東芝という企業は何を納入したか。東芝の原子力事業部が誇らしげに掲げているプラント納入実績表を見ると明らかである。日本原子力研究開発機構の臨界実験装置、先ほど紹介したそれが川崎にある。また国産1号研究炉、福島第一原子力発電所の1号機、2号機、3号機、5号機、6号機、「ふげん」、「もんじゅ」、そして六ヶ所村のウラン濃縮工場の第二期目の工事分、浜岡原子力発電所、これらのすべてに東芝が関って、発電所の建設を行っている。これが現在も、東芝原子力事業部のサイトに実績として掲げられているのだ。

こうしてずっとたどっていくと、いわば55年あたりを境目にして今日に至るまで、東芝は原子力発電所を次々と納入してきたといえる。その一方で、この企業は、私たちの身の回りに次々と電化製品を浸透させてきた。3.11前、その最も先端にあったのが「オール電化」ということばだった。それは電気の力がいかに必要なかということを宣伝するコピーであった。また東芝が単独提供でもっていた家庭ドラマの枠として、「東芝日曜劇場」がある。もっと身近なものを探すとしたら日曜日の夜、全国の家庭に

向けて放映される「国民的」アニメーション、すなわち「サザエさん」も、長期にわたって東芝の単独の提供が続いた。一方では「東芝日曜劇場」と「サザエさん」でお茶の間に電化製品を浸透させ、いかにも電器技術の進歩が家庭に幸福をもたらすかのように宣伝しながら、一方では「原子力エネルギーの平和利用」の美名の下に原発を次々と開発し、納入していたのが東芝である。その間ウェスティングハウス社を傘下に収め、最近では核の最終処理装置を、ウェスティングハウスを通じてモンゴルの政府に勧めるように依頼した、その背後で動いたのもまた東芝である。

2011年7月9日の『しんぶん赤旗』に「再稼働への圧力財界・業界」という見出しで、次のような記事が載っていた。

原産協会（当時は日本原子力産業会議）が2004年11月にまとめた報告書（「2005年の原子力ビジョンとロードマップ」）には、驚くべき言葉が明記されています。

「原子力の潜在的危険性（リスク）を十分にコントロールすることができる」

（中略）

原産協会の役員には、原発から利益を受ける業界、企業がズラリと並びます。今井会長は、鉄鋼最大手の新日本製鉄の名誉会長でもあります。副会長は西田厚聰東芝会長。理事には、電気事業連合会や日本建設連合会という業界団体の幹部だけでなく、三菱重工業、三菱商事、日立製作所などの個別企業の幹部も名を連ねています。

日本で原発の開発をしている会社は三菱重工業＋三菱電機、日立製作所、東芝という三系列である。

笹野の「タイムスリップ・コンビナート」という話は「あらすじ」をいえば主人公が住まいから「海芝浦」という駅に辿り着くまでの話、そういう意味では非常に単純な話であるが、主人公が通りすぎ、辿りついていく風景に敷きこまれているのは、沖縄をめぐる日本とアメリカとの関係であり、京浜運河の埋め立てに伴うさまざまなエピソードであり、あ

るいはまた東芝という会社がいつ何をしてきたのかという「歴史」や「社会」の在り方である。そうした重層的な「歴史」や「社会」のあり様が組みこまれているのが、「海芝浦」付近の「風景」なのだと、この小説は示しているのだ。

おわりに——「五五年体制」の始まりと終わり

「五五年体制」が始まって今日に至るまで、どのようなことが起こってきたのかということを、東芝という会社の沿革を語りながら話をしてきたが、もちろんそれは東芝だけを見ていれば片付くという問題ではない。それと同時に、「五五年体制」下にあつては、解釈改憲による自衛隊の存在認知、自民党と社会党という「1・5大政党」制の定着、さらに新聞、テレビ、ラジオ、芸能、スポーツなどのメディア、あるいはジャンルによる大衆の動員といったものが、冷戦という新しい形の戦争下における、日本の表面上の「独立」と対米従属構造の政治的、文化的、経済的な枠組みを構築していったのではないだろうか、ということを考えなければならない。

「タイムスリップ・コンビナート」は1994年6月号の『文学界』に掲載されたが、1991年のバブルの崩壊、ソ連消滅から今日に至るまでの20年間を考えると、この「五五年体制」が時間をかけて崩壊をしていく、その姿をひとつの「風景」の中に、「歴史」的なもの、「社会」的なものを見据えた上で予言したと言えるのではないか。笹野頼子という優れた文学的才能が、そういった原子力に頼る文化の終わりを見据えていたことを、たとえば「水晶内制度」（『新潮』2003.3）で、そうしたテーマをよりあからさまに取り上げたということからも裏付けることができる。

もちろん「タイムスリップ・コンビナート」という作品そのものは、原爆文学とも原発文学ともうたっていないし、作品中にある表象からも、一見ただけではそうした意味はほとんど気づかれまいだろう。しかし、実はそこで描かれる「風景」の中には私たちが生きている、原爆、原発の時代というものが、いかにも鮮やかに、敷き込まれている。したがって、「縁起」としてこの小説を読むものにとっては、十分に「原爆文学」であり、「原発文学」となりうる

のである。そうした意味において、優れた「文学」テキストは、それ自体が「歴史」であるともいえるのではないだろうか。

（2011年7月9日 WINC7月例会《文学表現によって考える 3.11：原爆文学と原発文学のあいだ》での口頭発表をもとに加筆した。）

（しまむら・てる フェリス女学院大学）